幻影ノ物語

Nino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻影ノ物語

【Ｎコード】
Ｎ０４８７Ｆ

【作者名】
Ｎｉｎｏ

【あらすじ】
西暦２０８０年。世界は未知の生命体幻魔と戦う中、ある少年との出会いが仮初めの世界に終節を入れるとは誰にもわからなかった。
そう、本人にでさえも・・・。

零幕：秋の始まりに

「雑魚相手なら左だけで十分だな。」

彼女には起こっていた現状が理解できなかった。当たり前である。転校生が目の前で幻魔と戦っているのだから・・・。

＊＊＊

西暦２０６０年。技術は格段に進化を遂げるが、今だに世界は戦いやめなかった。　しかし、事態はその年を境に変わった。

幻魔・・・町を破壊、殺戮を繰りかえし、死ぬとともにその姿が幻であったかのように消滅する。

その存在はすぐに世界の敵と判断され、世界は一時休戦という形でなんとか形を留め、２０年ぐらいが経過していた。

時代や技術が進化をしたとしても風景や人類の習慣的ものは変わらず日本は特にあまり現代と変わった所はなかった。

これはとある場所の話である。町の喫茶店で２人の男が話をしている。

１人はまだ１７歳ぐらいの少年、もう１人は２０代のスーツを着た人物である。

少年は、何枚も重なった紙の塊を読み終えるとスーツ男に言った。

「神鍵（しんじょう）　鈴音（すずね）ね・・・っで、その期間俺が彼女の護衛をしなきゃいけないってわけか？」

「そう言うことだ。上からの司令で、もう手続きも済んでる。」

そう言ってスーツ男、は手に持っていた煙草を吸いだし、少年は

目の前にあるコーヒーを飲んで一息ついた後に言った。

「上がか・・・。よっぽど重要な仕事なんだろうな・・・。」

「だろうな・・・。なんせ世界がどうにかなるんだからな。」

＊＊＊

「後半分か～・・・。」

彼女は疲れた感じに言いながら、自分の机に体の体重を預けていると友人が話し掛けてくる。

「ねぇねぇ鈴ちゃん。今日新しい先生と転校生がくるんだって。」

「ふ～ん・・・。けどそれっておかしくない？昼休み開けに転校してくるなんて、しかも新任の先生も同じ時間帯に同時になんてさ・・・。」

「それもそうだね。なんかの偶然じゃないのかな？」

友人は鈴音の疑問に対していつもどおりの回答をすると、学校のチャイムがなって席に戻っていく。

「よし、みんな席に着いてるな・・・。いきなりだか転校生を紹介する。入ってこい。」

「はい。」

先生に呼ばれると教室のなかに一人の男子生徒が入ってくる。

先生は後ろのホワイトボードに名前を書くと、男子生徒に紹介を

させる。

「速瀬（はやせ）　桃華（とうか）です。よろしくお願いします。」

これが桃華と鈴音の最初の出会いであり一つの物語の始まりだった。

壱幕：守護の双刀使い

「ここでは1の解で出たXをZに代入することによって・・・。」

無事に転校あいさつをそれなりにこなした桃華は、とりあえず数学などの授業を受けていた。

午後の授業も終わり、桃華は今日もらった教科書等をバックに詰めて帰るような動作をすると、ある人物から声が掛かった。

授業と授業の休みの間に、護衛対象である神鍵　鈴音とよく話している人物、日高（ひだか）　祐希（ゆき）である。

「えっと、なんですか？日高さん。」

「速瀬くん今日は暇？今からみんなでカラオケに行くんだけどさ、よかったら速瀬くんも来ない？」

桃華は少しばかり考えた感じな動きをすると、すまなそうな顔していう。

「すいません。まだ引っ越しの片付けが終わってなくて、帰ってこないと兄弟に何言われるか解らないんで・・・。」

「そうか、それじゃあしょうがないね。じゃあ引っ越しが落ち着いたらまた誘うね。」

「はい。次のお誘いを楽しみにしています。」

そして町に行くメンバーが教室を去ったあと、桃華は誰もいない屋上にむかって携帯電話を取り出すと、誰かに電話をかけた。

『どうだ、そっちの状況は？』

「まぁ上々。クラスにはうまい具合に溶け込めるとは思う。そっちはどうなんだ雉月（きじつき）。」

『こっちも上々だ。初の先公の仕事にしては、物分かりが良い生徒が多くてなかなか行けたほうだ。俺はもう少しこっちの仕事があって動けない。護衛の方は頼んだぞ。』

「分かってるさ。じゃあ、護衛対象とは一定の距離を取りながら、任務を続行する。」

『了解だ。』

雉月のその言葉を聞いた桃華は、誰もいない屋上で携帯電話を閉じて、人気のないところにむかって屋上から飛び降りた。

＊＊＊

「また明日ね～。」

「うんまた明日。」

鈴音は祐希達と別れて自宅へと帰宅しようとしていた。

「今日も一日が終わっちゃった。ただ平凡に毎日を生きて、何が楽しいのかな私・・・。」

鈴音は一人でそんなことをぼやきながら、街の中心部から少しば

かり離れた住宅街を歩いていると、少し前の曲がり角から犬とは別の唸り声が聞こえてきた。

「ん？」

鈴音は不思議に思い、角から曲がり角の先をそっとみた。
暗くてあまり遠くまではみれないが、人の下半身だけが外灯の明かりで見え、何かの拍子で倒れたままならまずいと思い、それに近づいて確認をした鈴音は言葉を失った。
そこにいた人であったものがあり、鈴音が明かりで見えた腹部の上からは何もなく、食い千切られた跡のに血が散乱していた。

「うっ・・・。」

鈴音は吐き気のようなものを感じて、口を手で押さえてその場で座り込む。
ふと気が付くと、鈴音に何かの足音に、動物とは違う唸り声がじょじょに近づいてくることが解った。
鈴音はそっちの方をみると人間ではない二足歩行をする何かが立っていた。
人型ではあるが２ｍ以上の身長を持ち、鋭い爪と牙、そして頭に２本の角を生やしている。
形を例えるのならば、日本の昔話に出てくる鬼のような化け物である。

「幻魔・・・。」

唸り声を出しながら、鬼の幻魔は鈴音に気が付き、鈴音に近づこうとした時に数発の銃弾みたいなものが幻魔に撃ちこまれた。

「護衛初日から幻魔と戦うことになるとはな。」

そんなことを言いながら、一人の影が外灯の明かりに照らされながら近づき、鈴音の隣で止まった。

鈴音の通っている学校の男子制服を着ている桃華であり、右手に携帯電話を銃のような形にして持っている。

「速瀬くん・・・？」

「どうも。学校以来だね。神鍵　鈴音さん。」

「なんで速瀬くんがここにいるの？何で幻魔が・・・！！」

「聞きたい気持ちは分かるが、相手は待ってくれないみたいだ。」

幻魔は低い叫び声をあげながら鈴音に重い拳を落とし、桃華は鈴音を抱き抱えながら後ろに避ける。

後ろに下がった桃華は鈴音を置くと、携帯電話を開いてボタンで入力すると桃華ではない声が聞こえてきた。

〈Ｓｔｎｂｙ－Ｏｋ〉

そう言い終えると同時に、桃華は携帯電話の赤外線部分を腕時計の画面の前をスラッシュした。

桃華は一瞬光に包まれて、学制服とは別の格好をして出てきた。

首から上は桃華ではあるが、服装が変わっていた。踵まである長く青いコートを半袖までたたみ、中にアンダージャケットに黒のＴシャツを着こみ、下は藍色のジーンズはき、腹部に大きいベルト、そしてベルトの両腰に１本ずつ刀が鞘に収まっている。

「雑魚相手なら左だけで十分だな。」

そういって桃華は右腰に収納されている刀を左手で抜いた。

弐幕：裏と日常を歩く者

「さてと・・・。やりますか！！」

そういった桃華は左手の刀の先が後ろの方に構え、右手は持たないで刀の持つ部分の先端部に手をパーにして添えるように構えると同士に、幻魔にむかって走りだした。

幻魔は唸り声と同士に、攻撃範囲に入った桃華に右手を振り落とす。

「・・・。」

桃華は、何もなかったかのように幻魔の攻撃を避け、予備動作をなしに左手に持った刀を逆手で斬り上げる。

振り上げられた刀は幻魔の右腕を切断して、幻魔は悲鳴を上げるかのように唸り声を叫びながら後ろによろめいた。

「こいつで・・・終わりだ・・・。」

桃華は幻魔の隙を逃さず、幻魔の懐に飛び込むと同時に跳躍。跳躍して左手に持った刀で幻魔の首を何も抵抗をなく切断する。頭は宙をまい、首から上のなくなった幻魔は声を上げることもなく地面に正面から倒れ、その姿を消滅させる。

「これで終わりかな？。」

桃華は一息付いたのちに、刀を梅雨をとるかのように上から下へ一降りして鞘にしまうと、携帯電話を取り出して雉月にかける。

「あぁ、雉月か？護衛中に彼女が幻魔と遭遇して、それを撃退した。」

『了解した。あと、彼女以外に目撃者とかはいたのか？』

桃華はその質問に対して、若干間を置いたのちに口を開く。

「いたが、彼女が目撃したときには手遅れだった・・・。処理班をこっちに回してくれないか？」

『わかった。では、そのまま彼女を家まで送ってやれ。』

「ここまでみられた以上、接触したところで変わりはないって考えか？」

『どちらにしてもだ、このまま去っとも明日から警戒されて、護衛がしずらくなるだけだ。それだったら接触した方が無難だ。』

「了解。」

桃華は携帯電話を切ると、鈴音の方にむかって歩きだした。

「ナビ。システムオフおよび、モードをノーマルに切り替えてくれ。」

〈ＯＫ〉

腕時計から聞こえてきた音声は、桃華の格好を一瞬にして学制服に戻した。

「立てるか？」

そう言って鈴音の前で止まった桃華は鈴音に手を差し伸べると、鈴音ははっとして立ち上がる。

「まぁ色々あって頭の整理も付かないと思うし、家まで送るよ。」

二人は鈴音の家の方に歩きだした。

＊＊＊

桃華は鈴音の家に帰るまでの間、鈴音に何も質問を聞かれることはなく、彼女をそのまま部屋の前まで送り届けると、桃華は何もなかったかのようにその場を去っていく。

「こんなんでよかったのか？」

〈Ｗｈａｔ？ｍｙＭｓｔｅｒ．〉

「いや、彼女何も質問をしてこなかったから、少しばかり気になっただけだ。あと・・・ナビ。一々英語じゃなくて日本語でしゃべれよ。聞いているこっちが面倒だ。」

〈了解です。マスター。まぁマスターもわかってはいるとは思いますが、多分思考が追い付かなかったか、すでに警戒されているのってところでは？〉

「それだけなら良いんだけどな・・・。」

桃華はそう言いながら反対側の歩道の方へと歩いていった。

＊＊＊

桃華が転校してきて来て3日が過ぎた昼休みのことである。
桃華はそれなりにクラスに馴染み、他の男子とお弁当を食べていると、教室の女子から声がかかった。

「速瀬くん。廊下で速瀬先生が呼んでるよ。」

「雉月が？」

桃華が廊下に出ると、桃華と同時に来た教師が待っており、桃華はすぐ教室に戻ってきた。
桃華はすぐに自分の机に戻って食事の続きを食べはじめると、クラスの男子が聞いてきた。

「なんで先公に呼ばれたんだ？」

「あぁ、今日家に客がくるから買い物を頼まれたんだよ。」

そう呆れた声で桃華は言い、弁当を食べていると、笑いながら友人がいった。

「兄貴の命令ってところか。」

「そう言うことだ。どうせ、俺に料理を作らせるんだろうな・・・。」

桃華は呆れた顔をしながら言い、ふと鈴音の方をみた。

参幕：本心と使命の狭間（前書き）

更新は不定期ですが、本編の感想や、誤字があったら教えてください。

参幕：本心と使命の狭間

『何でこんなことになったのでしょうか？』

鈴音は頭の中でそんなことを考えながら、目線を下にそらして、少し気まずそうな顔をして、速瀬家のリビングにあるソファーに座っていた。

話は２０分前ほど遡る。

自分のマンションに帰ろうとしていた鈴音は、マンションの入り口前で座っている人影を見かけた。

「速瀬くん・・・？」

「どうも。」

桃華はそう言いながら、片手に中身の入った買い物を持って立つ。

「何でここにいるの？確か今日は客が来るって言って・・・。」

「ほとんど準備が終わって、足りないものの買い出したついでに待ってたら、待っていた人が来たわけさ。」

「来たって誰もいないけど？」

鈴音はそんなことを言いながら、自分と桃華以外誰も周りにいないことを確認をすると、桃華は鈴音に向かってわざとらしく丁寧に言う。

「神鍵　鈴音様。本日のお客様はあなたです。」

っとこのような感じになり、今にいたるわけである。

＊＊＊

「一応教師として生徒を遅くまで外出させるのはいけない気がするがな、こんな時間なんかに呼んで悪いな。」

反対側のソファーに腰を下ろしている雉月がいて、煙草を吸わずにすまなそうな感じに言う。

「いえ、どおせマンションで一人暮らしですし、別に大した用事はなかったのでちょうどよかったです。」

鈴音はそんなことを言いながら軽く笑うと、桃華が料理の乗った皿をもってきた。

「本日のディナーはサラダにサーモンのカルパッチョ、スープにミネストローネ、メインはカルボナーラを作ってみました。」

桃華は作った料理の名前を言い終えると、ソファーではない椅子のあるほうのテーブルに料理の皿を置いていく。

「すごい・・・。」

鈴音はシンプルな感想を述べていると、雉月は椅子に座り、鈴音も椅子に座った。

「おっ！！今日はパスタの新作か。」

「本に書いてあるのを見てそのまま作ったやつだけどね。」

そんなことをさらりと言った桃華は、自分の席に座り、雉月は食べ始める前に鈴音にいう。

「食後にゆっくり話すが、お前には、世界を変える力がある。」

「え・・・？」

いきなり雉月が言った言葉に対して、鈴音は言葉を失い、雉月と桃華は何もなかったかのようにカルボナーラを食べ始める。

＊＊＊

「何でたかが私一人に世界を変えられる力をなんて・・・。」

食事の後に鈴音のその言葉をいう。

「詳しくまでは分からないが、神鍵。お前が、何かしらのシステムを起動させる鍵になっていることは間違いない。」

「そんなふざけた話で・・・！！」

鈴音は苛立ったような声で言うと、桃華は冷たい口調でいった。

「しかし、お前は実際幻魔に狙われ、オレらが護衛についている事実は変わらない。」

「・・・！！」

鈴音は桃華の言ったことが事実であり、鈴音は言葉を詰まらせる。しかし桃華は言い方を緩めることをなく言った。

「それに、俺達が護衛についてからのこの3日で7回狙われた。知ってるか？」

「だからなんだっていうのよ！！所詮はあなた達が勝手にやってることがそんなに偉いの！？」

鈴音は怒った口調で椅子から立ち上がり、桃華は冷たい口調を崩さず言う。

「別に・・・そんなつもりはないな。」

「あっそう！話はそれだけね。」

「あぁ。」

桃華のその言葉ののちに、鈴音は速瀬家を無言で出ていった。

「桃華。お前技とあんなこと・・・。」

鈴音が出ていった後に、雉月は桃華に話し掛けようとすると、桃華は一言だけつぶやいた。

「俺は本当、どうしよもない奴だよ・・・。」

＊＊＊

「なによあいつ・・・。いきなり護衛について・・・。」

苛立ちに任せて速瀬家から飛び出た鈴音は、４００m程離れた場所にいた。

その瞬間、何かにドンっと押し飛ばされ、鈴音は飛ばされながら見た。

その光景は幻魔が桃華を鋭い爪での攻撃を受け、尻餅をついた鈴音の前に転がってきた。

「桃華！！」

「はぁ・・・う・・・ぐぅ・・・。」

桃華は、裂かれて血の出る胸部を手で押さえながら立ち上がる。

「マスター、思っていたより深かいですよ。しかもこのタイプの幻魔は・・・。」

ナビはそう言い掛けたとき、桃華は息を切らしながら苦笑した。

「あぁ、お前の言うとおりだ。けどな、決めちゃったんだ。彼女を守るってさ・・・。そのためなら・・・。」

桃華は何かをつぶやくと、目の色が赤色にかわりだす。

四幕：鏡のような存在をもつもの

「桃華・・・？」

血を流しながらも立ち上がった桃華は、目を本来の青色から赤く染まりはじめる。

桃華の異変に気が付いた鈴音は名前を呼ぶが、反応が帰ってこない。

そして幻魔は見えない危険に釘付けになり、動けない状態になった。

桃華の髪が白に変色し始めた時、鈴音の頭の上を通り過ぎていきながら声が聞こえてきた。

「兄さん！！」

その声と同時に、幻魔の腹部に棒状の何かがめり込み、その攻撃ののちに、右手の棒状の物体に炎がともりながら振り上げる。

その一撃を食らった幻魔は言うまでもなく、炎上しながら腹部から真っ二つになった。

悲鳴のような声をあげながら黒焦げになった幻魔はその場で消滅し、大体鈴音と同じ身長の少女は桃華の方に体を向ける。

「すいません兄さん。」

その一言を言いおわると、彼女はいつのまにか桃華の腹部に一撃を入れていた。

「！？・・・ありがとう申穹（しんくう）。」

彼女の一撃が腹部に直撃し、途切れていく意識の中で桃華はそう

一言言ったのちに気を失い、申穹は桃華を背中に背負って鈴音の近くにやってきた。

「えっと、神鍵さんですよね？」

「えっ・・・はい。」

唖然としていた鈴音は何かを思い出したかのように言うと、彼女はさっきまで戦っていたとは思えないぐらい落ち着いた口調で話し掛けてきた。

「初めまして。私、速瀬　桃華の妹の、速瀬（はやせ）　申穹（しんくう）です。今後ともよろしくお願いします。」

彼女はそういって鈴音に笑いかけた。

＊＊＊

「・・・ふぅ。」

鈴音は学校の教室で空を眺めていた。

あの日から数日がすぎ、桃華は今日も学校を休んでいた。あの日の次の日から申穹はこの学校に一つ下の学年に転校してきていて、鈴音は申穹が毎日護衛についていた。

鈴音は申穹と下校している時に桃華の体の状態について聞くが。

「兄さんは、そんなにたいした怪我じゃないからあんまり気にしないでくれって言ってました。」

「そうなんだ。」

そのあとはあまり深く聞こうとは鈴音は思わなかった。
彼女は嘘をついているすぐに思えたし、あんな怪我をして大した
ことはないとしか思えなかった。

「おはよー。」

そんなことを言いながら教室のドアがスライドされる。
数日前の出来事が何もなかったかのような感じに桃華が教室の中
に入ってきて、自分の席にいつもどおりに座る。
よく話していた友達が聞くと、質の悪い風邪にかかったなどとい
って笑って誤魔化し、時刻は放課後になった。

「体、大丈夫なの？」

「まぁ、この通り。」

学校の屋上でそんなことを言いながら桃華は軽く笑った顔をした
が、鈴音は何かしらの違和感のようなものを感じ取っていた。

「ん？どうかした？」

「なんでもないよ。」

鈴音が何かを考えていたことを感じ取った彼は鈴音に近寄った。

「あなたは一体なにものなの？」

「ん？俺は・・・。」

「桃牙！！」

その声と同時に、鈴音には変な光景が目の前に見えた。
いきなり鈴音の目の前に表れた桃華が、桃華に飛び蹴をして、最初にいた桃華が攻撃を防御している。

「下がっていろ鈴音。」

「あーあ。せっかくこれから楽しくなるはずだったのにな・・・。」

「桃牙。何しにきたんだ？」

桃華は自分の姿形が似ている人物に対して剣構える。

「何って、桃華の守護するお姫さまに挨拶をしにきただけさ。始めまして。桃牙です。」

桃牙はしれっとそんなことを言いながら、左手に桃華と同じ剣を構える。

「殺りあい気か？」

桃華と桃牙の間で殺気が漂い、すぐにでも戦闘が始まってしまうのではないかという状態になる。

「・・・やめた。」

桃華の疑問に対して一息置いたのちに桃牙は武器を閉まって、立ち去りながら言った。

「まだ傷・・・いや、不安定な状態で覚醒しようとした反動がまだ残っている奴とは戦いたくないからね。」

「・・・。」

「また会いましょう。桃華、鍵神の姫さま、それに・・・雉月。」

桃牙は一礼してその場から消えると、桃華の武器が地面に転がり、肘が地面に付いて四つんばいの状態になる。

「桃華！」

四つんばいの状態になる桃華に慌てて鈴音はかけよる。

「大丈夫だこの程度。」

「なにが大丈夫なの！自力で立ててないじゃない。」

「どんなことがあっても、おまえを守るのが俺の使命だ。」

「使命だからって、桃華を犠牲にしなきゃいけないの？」

「あの～、お取り込み中すいませんが・・・。」

「「！？」」

二人は声に気が付き、その方に顔を向くと雉月が目を瞑った申穹を背中に背負って出てきた。

「桃華・・・やっぱり来てたか。」

「何がやっぱりだよ。長距離から銃構えてばれてたくせに。」

「そんなこと言えるみたいだし、裏の車で歩けるな。」

「あぁ。」

そう言った桃華はフラフラしながら立ち上がると、学校内へ続く階段に向かい、雉月に桃華はすれ違いざまに何かを言った。

「そうだな。それの方が良いだろう。」

何かを了解した雉月は、鈴音の方を見たのちに言う。

「神鍵さん。私の車が校舎裏にありますので、家まで送ります。」

「えっ・・・はい。」

そういって鈴音達は屋上を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0487f/

幻影ノ物語

2010年10月17日06時47分発行